

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
しー27	小承気湯	<p>大黄 (苦寒) 4g・厚朴 (苦温) 2g・枳実 (苦寒) 2.1g</p> <p>上の3味を水160mlを以て50mlに煮詰め、滓を去り2回に分けて温服する。初め服用して便通のある時には、更に服用する必要はない。便通の無い者は、残りの1回分を服用する。</p> <p>弁太陽病脈証併治上第五第31条 (傷寒論)</p> <p>「問うて曰く。証、陽旦に象る。法を按じて之を治す。而るに増ます劇しく、厥逆咽中乾き、両脛拘急して譫語す。師曰く、夜半に手足当に温まるべし、両脚当に伸ぶべしと。後師言の如し、何を以て之を知る。答えて曰く、寸口の脈浮にして大、浮は則ち風と為し、大は則ち虚と為す。風は則ち微熱を生じ、虚は則ち両脛攣る。病証桂枝を象る。因て附子を加えて其の間に参ね、桂を増して汗を出さしむ。附子は経を温む。陽を亡すが故也。厥逆、咽中乾き煩躁、陽明に内結、譫語煩乱す。更に甘草乾姜湯を飲ませれば夜半に陽氣環り両足当に熱すべし、脛尚微しく拘急すれば重ねて芍薬甘草湯を与う。しかすれば乃ち脛伸ぶ。承気湯を以て微瀉するときは則ち其の譫語止む。故に病の癒ゆる可きを知る。」</p> <p>曰く、^{かたど}象る、^{しか}而るに、^{ます}増ます、^{せんご}譫語、^{まき}当に、^{もつ}以て、^{すなわ}則ち、^{ひきつ}攣る、^{より}因て、^{つら}参ね、^{かほ}環り、^{すね}脛、^{すこ}微しく、^{すなわ}乃ち、^{びとう}微瀉</p> <p>癒ゆる可き</p> <p>解説 お尋ねしますが、病証が桂枝湯の通りであったので、法則に従ってこれを治療したところが、治るはずの病が益々激しくなって、手足の先の方から冷えて来て、咽の中も乾いて、両足の脛が突っ張って、うわごとを言う様になってしまった。このような場合、夜中に手が温かくなるはずであり、そうなると両脚が伸びるはずであると師が言われたが、その後師が言われる通りであった。どう言う訳で、この様になる事が判るのですか？</p> <p>師が答えて言われるには、寸口の脈が浮いて大きい場合に、寸口の脈の浮は、風邪によって起きているし、大は、血虚が原因である。風邪は微熱を生じるし、血虚は両足の脛が痙攣する様になる。病証が桂枝湯に似ているから桂枝湯を与え、また桂枝湯に附子を加えて何回かやってみた。更に桂枝の量を増やして汗を出させてやった。附子は経を温めるのであるが、それは陽が少ないからである。手足が冷えて、咽中が乾き苦しくて、病邪が内に結ばれうわごとを言って苦しがる時には、更に甘草乾姜湯を飲ませれば、夜半に陽氣が戻って来て、両足が温かくなって来るはずである。脛がなお少し拘急していれば、その上に芍薬甘草湯を服用させなさい。そうすれば脛も伸びて楽になる。承気湯で少し軟便がつけば、その内熱から来るうわごとは治るのである。だから病が治ると言う事が判るのである。</p> <p>弁太陽病脈証併治中第六第26条 (傷寒論)</p> <p>「傷寒大便せざること6、7日、頭痛熱有る者は承気湯を与う。其の小便清める者は裏に在らず、仍お表に在るを知る也。当に須らく汗を發すべし、若し頭痛する者は必ず衄す、桂枝湯に宜し。」</p> <p>仍お、^{まき}当に、^{すべか}須らく、^{もし}若し、^{じく}衄す</p> <p>解説 傷寒に罹ってから大便が出ないことが6、7日続いて、頭痛がして、熱のある者には、承気湯を与えて裏の熱を取ってやればよい。その場合に、病人の小便の色が濁っていない者は、病熱が裏に入っていないでまだ表にある。当然汗を發してやるべきである。もしも大便が出ないことが6、7日続いて、頭痛するものは、必ず鼻血が出る。この様なものには、桂枝湯がよいのである。太陽陽明合病で、陽明病が強ければ裏熱のために大便が出なく、小便赤渋となる。この時は承気湯類を使うが、太陽病が主体であれば小便は清白で、桂枝湯を用いて発汗させる先表後裏の方法を取る。もし表邪が鬱して頭に昇ってしまうと、クラクラ、イライラして頭痛し、血絡を傷めて鼻血が出る。この様な場合には、鼻血が出るのと、桂枝湯の作用が一緒に作用して、邪が排出され、鬱熱も取れて治ってしまう (このような鼻血を紅汗という)。</p> <p>弁陽明病脈証併治第八第31条 (傷寒論)</p> <p>「陽明病、脈遅、汗出ずると雖も、惡寒せざる者は、其の身必ず重く、短気腹滿して喘す。潮熱有る者は此れ外解せんと欲す。裏を攻む可き也。手足澀然として汗出ずる者は、此れ大便已に硬き也。大承気湯之を主る。若し汗多く微に發熱惡寒する者は、外未だ解せざる也。其の熱潮せずんば未だ承気湯を与う可からず。若し腹大いに滿し通ぜざる者は小承気湯を与え微しく胃氣を和す可し。大いに泄下せしむる勿れ。」</p> <p>雖も、^{いせど}解せんと、^げ攻む可き、^{しゅうぜん}澀然として汗出ずる、^{すで}已に、^{つかさど}主る、^{いまだ}未だ、^べ可からず、^{もし}若し、^{すこ}微しく、^{せつか}泄下せしむる^{なか}勿れ</p> <p>解説 陽明病で、脈が遅で、若し汗が出る事が多く、微に発熱、惡寒する人は、表が未だ解していないのであるが、同じく脈が遅となり、汗が出ていても惡寒のしない人は、表証が止んだのであり、身体が必ず重だるくなって、呼吸が早くなり (息切れ)、腹が張って (腹滿) ゼイゼイとして、潮熱のある人は、熱が裏の腑である胃に入ったのであり、裏を攻めるために下しをかけてやるべきである。その場合に、手足からしっとり汗が出ている者は、四肢は脾胃の主るところであり、身体の体液がよって胃に不足し熱が生じ、大便が既に硬くなったのであるから、大承気湯で胃熱を下してやればよい。もし汗が多く出て、微発熱、微惡寒のあるものは、表証が未だ残っているのである。その熱の状態が潮熱の様にならない場合には、大承気湯を与えてはいけぬ。もし大いに腹部膨滿し、便秘する場合は、小承気湯を与えて少し胃の氣を調和してやればよいのであって、大承気湯で大いに下し過ぎてはいけぬ。</p> <p>大承気湯証</p> <p>新古方薬囊によれば「喰い過ぎ等にて熱あり、身体だるく、腹下りて、食物を欲せざる者。胸張り、腹堅く、足縮まりて引きつけたる者。此の場合首筋は板の様ならず、腹張り痛み便通なく、舌の黄色き者等。」と記されている。</p> <p>「方劑決定のコツ」の注釈</p> <p>舌が黄色く乾燥している場合には、内熱による事が多く、胃熱が強かったり、胸脇の熱などによって現われる。</p> <p>黄苔に湿り気のある時には、虚熱によって現われることが多い。</p> <p>小承気湯証</p> <p>新古方薬囊によれば「大承気湯証の軽き者に用ふべし、或は大便幾日も無く大承気湯を用ひ度き所なれども大承気湯にて間違いないかと大事を取る時に、試みに用ひることがある。此の場合小承気湯を服して、腹内にグーグーと腹鳴りが聞こゆる者には大承気湯を与へて好し。若し軽き時は、此の湯にても癒ゆることあり、風などの後に寒氣は取れたれども熱除かず、身体熱苦しく、小便数多く、大便堅きものにも宜し。」と記されている。</p> <p>弁陽明病脈証併治第八第32条 (傷寒論)</p>

「陽明病、潮熱、大便微硬の者は大承氣湯を与う可し。硬からざる者は之を与えず。若し大便せざること6、7日なれば恐らく燥屎あらん。之を知らんと欲するの法は少しく小承氣湯を与え、湯入りて腹中転屎氣する者は此れ燥屎有り。乃ち之を攻む可し。若し転屎氣せざる者は此れ但だ初頭硬く後必ず溏す。之を攻む可からず。之を攻むれば必ず脹満し食す能わざる也。水を飲まんと欲する者に水を与うれば則ち噦す。其の後発熱する者は必ず大便復た硬くして少き也。小承氣湯を以て之を和す。転屎氣せざる者は慎んで攻む可からざる也。」

与う可し、若し、燥屎、転屎氣、乃ち、攻む可し、溏す、食す能わざる、則ち、噦、復た、以て

解説 陽明病で、潮熱（身体の中の方から熱が出て来る様子を潮に例えている）を発するのは胃の実熱による。大便が少し硬い者には、大承氣湯を与えるべきである。大便が硬くない者には与えてはいけない。もし大便が出ないことが6、7日も続く場合には、恐らく燥いた屎があるであろう。燥屎があるかどうかを知らうとする方法は、少しく小承氣湯を与えてみる。小承氣湯を服すると、腹の中がグーグーと鳴るものは、燥屎がある証拠であるから下しをかけてやるべきである。その場合に、腹の中がグーグー鳴らないもので、ただ初めの方は便が硬くて、後の方がドロドロのアヒルの様な便をするものには、未だ胃熱が実していないから下剤をかけてはいけないのである。この様な胃実になっていないものに、間違えて下しをかけると、胃が冷えて、必ず腹が張って食欲が無くなってしまふ。この様な人で、水を飲みたがっている者に水を与えると、更に胃が冷えてシャクリを起こしてしまふ。下してはいけないものを大承氣湯で下した後で、熱を発する者は、必ず大便がまた硬くなって少ないはずである。この様な場合は小承氣湯で内熱を調和してやればよい。小承氣湯を少し与えて一転屎氣しないものには、間違っても大承氣湯の様な強いもので下しをかけてはいけないのである。

陽明経には、陽明胃経と陽明大腸経とがある。太陽経の熱邪が陽明経に内攻すると、目痛、鼻乾、身熱、口乾などの症状が現われる。しかし大便は硬くなく、大抵は悪寒が残っている。また例え大便が硬くても、少しでも表証が残っておれば、まだ腑の熱になっていなく、脈も浮のことが多い。この場合は先ず発汗する。熱邪が陽明の腑である胃、大腸まで内攻すると、陽明内実証となり、身熱、汗出、不悪寒、潮熱、譫語、腹満、大便硬などの症状が現われる。この場合は下剤を用い腸から熱を抜いてやる。

陽明内実証が形成される原因としては、

一つには、太陽病で、汗、吐、下などにより、熱邪が裏に入り、津液を損傷することによって生じる。この場合、胃、大腸は乾燥し潤いを失って大便も硬くなる。また胃、大腸の燥熱が激しいために、津液は追われる様に小便として出て、小便は多くなるのに、胃、大腸に還元出来ない故に大便は硬くなる。つまり小便の回数が多くなる程、胃、大腸の燥は悪化し、便秘もひどくなる。また停滞した熱邪が心にも影響すると、煩躁も生じる。

一つには胃、大腸の燥熱が激しいために、津液は追われる様に汗が多くなって、胃、大腸が乾燥して大便が硬くなるという悪循環も生じる。燥熱が上行し、心を蒸す状況が生じると譫語が起こる。例え胃、大腸の燥熱、大便硬による便秘、小便多回数、発汗があっても、軽い発熱、悪寒があれば表証が残っているので先ず発汗剤で発汗させる。もし軽い発熱、悪寒の表証がなければ、小承氣湯で下して胃、大腸を治せばよい。もし表証が残っていても、いなくても津液が損傷するまでに至っていない軽度、又は初期の段階の陽明病腑証のときは、調胃承氣湯で軽く下して、胃気を調和させるとよい。

一つには、太陽病を発汗したけれど発汗が不十分で、表証の邪熱が裏に入り、内熱が外に蒸して汗が出て、悪寒しない時は、調胃承氣湯を用いて胃気を調和するとよいが、表証が残っていて発熱、悪寒を伴う時は、下してはならず葛根湯を用いて表邪と、陽明経に陽鬱している熱邪を宣散させる。

小承氣湯は、大承氣湯を選択したいが間違いではないかと迷う場合に用いるが、もし小承氣湯を服用した後、腹中でガスが動く場合は大承氣湯に変えるか、または小承氣湯を継続服用させて様子を見てよい。

参考 太陽の邪が未だ残っていて、完全に陽明の腑の熱になり切っていないのに下すと、表は熱し、裏は虚、または寒（冷え）の状態になり、腹が張って食欲が無くなる。この時は小建中湯・人参湯を用いて脾胃を温め、陽気を高める。

弁陽明病脈証併治第八第 37 条（傷寒論）

「陽明病、其の人汗多く津液外に出で、胃中燥くを以て、大便必ず硬し。硬ければ必ず則ち譫語す。小承氣湯之を主る。若し一服にて譫語止めば更に復た服すなかれ。」

出で、以て、則ち、譫語、主る、若し、復た

解説 陽明病の病人で、汗の出が多いと体液が体外に出過ぎて胃の中が燥いてしまうために、大便が必ず硬くなる。大便が硬くて熱が胃に結ばれると、譫語を発する。これには小承氣湯が主治する。もしもこの場合に、小承氣湯を一服して譫語が止めば、更に服用する必要はない。

小承氣湯証は、大便が既に硬くなった陽明腑実の証で、胃中、および大腸の燥熱が結集した状態であり、胃中の燥熱は、既に実し、陽気の余分は見られるが、大腸の燥熱は軽い、即ち燥熱の初期に用いられる調胃承氣湯の証とは異なる。調胃承氣湯証、小承氣湯証共に胃中に結集した燥熱が心を蒸し、その結果心煩、躁動不安、譫語が生じる。この心煩は梔子豉湯証の虚煩ではなく、実煩である。

小承氣湯中の大黃は陽明に停滞した熱実を下し、厚朴は腹満を除き、枳実は痞硬を破る。また厚朴・枳実は行気導滯、下降の作用を持つので、大黃の瀉下作用を援助する。

燥屎があれば、芒消の入った大承氣湯を用いるべきである。

弁陽明病脈証併治第八第 38 条（傷寒論）

「陽明病、譫語、潮熱を発し、脈滑にして疾き者は小承氣湯之を主る。承氣湯一升を与うるに因って腹中転屎氣する者は更に一升を服す。若し転屎氣せざれば更に之を与うる勿れ。明日大便せず、脈反って微洪の者は裏虚する也。治し難しと為す。更に承氣湯を与う可からざる也。」

譫語、疾き、主る、因って、転屎氣、若し、与うる勿れ、反って、微洪、治し難し、与う可からざる

解説 陽明病で、うわごとを言って潮熱を発する者は内実であり、脈滑（脈がクリクリして早い）者は裏熱であるから、小承氣湯が主治する。小承氣湯1回分を服用することによって、腹の中がグウグウと鳴る者には、更にもう1回分を服用させなさい。もしもグウグウ鳴らない者には、その上に服用させてはいけない。そして明日になっても大便が出ないもので、脈が微かて洪っている者は裏が虚しているの、これは治り難いのである。例え大便が出なくても、この上に承氣湯を与えてはいけない。

弁陽明病脈証併治第八第 72 条（傷寒論）

「太陽病若しくは吐し、若しくは下し若しくは汗を発して微煩、小便数、大便因って硬き者は小承氣湯を与えて之を和せれば癒ゆ。」

解説 太陽の経を病んでいて、吐かせたり、または下したり、または汗を発したりしたために、少し苦しがり、小便の回数が多くなって、大便がそれによって硬くなったものは、小承氣湯を与えて内熱を和してやれば治るのである。

弁陽明病脈証併治第八第 73 条（傷寒論）

「病を得て2、3日、脈弱、太陽、柴胡の証無く、煩躁し心下硬きこと4、5日に至らば、能く食すと雖も小承気湯を以て、少々与えて微しく之を和し、小しく安からしむ。6日に至らば承気湯一升を与う。若し大便せざること6、7日なるも、小便少なき者は食す能わずと雖も、但だ初頭硬く後必ず溏し、未だ定まりて硬を成さず。之を攻むれば必ず溏す。小便利し尿の定硬を須ちて、乃ち之を攻む可し。大承気湯に宜し。」

能く食すと雖も、以て、微しく、小しく、若し、但だ、未だ、溏す、尿の定硬を須ちて、乃ち、攻む可し

解説 病に罹って2、3日経って、脈が弱くて、太陽病とか柴胡の証が無く、熱がって苦しく、みぞおちの辺りが硬くなり、4、5日になって食欲があっても、小承気湯を少しずつ与えて少し調和してやると、体が楽になる様子を見て、その翌日になって大便が出なかったならば、小承気湯を1回量を与えてやればよい。もしも大便がないこと6、7日も続いて、小便の回数、量とも少なく食べることが出来なくて、便が初めだけ硬くて、後に出る便が泥状便の者は、まだ胃熱が実して来ないために便が硬くならないのであるから、下しをかけてしまうと必ず便が軟らかくて下るのである。小便がよく出る様になって、大便が固まって来るのを待って、それから下してやるべきである。それには大承気湯がよい。

弁厥陰病脈証併治第十二第49条（傷寒論）

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第44条（金匱要略）

「下痢譫語する者は燥屎有る也。小承気湯に宜し。」

解説 下痢をしていてうわごとをいう者は、内熱があり、乾いた屎があるからである。小承気湯が主治する。陽明腑実証では一般的に便秘になるが、この条文では下痢があり、一方では燥屎（乾いた硬い便）がある。これは「熱結傍流」の証で、腸内に燥屎が詰まっていて、同時に溜まっている燥熱が津液を腸管内に絞り出して、硬い便の周りから洩れて出るので、薄い便水に包まれた硬い便塊が排泄される。この便の状態を、この条文では下痢と言っている訳である。この下痢は量が少なくても臭気が異常に強い。

「熱結傍流」の証は、非常に津液を消耗し易く、燥熱が益々甚だしくなってしまうので、症状がひどくならない内に小承気湯で攻下する必要がある。

小承気湯（千金翼）

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第51条（金匱要略）

「千金翼小承気湯は大便秘せず噦して数譫語するを治す。」

解説 千金翼の小承気湯は、下痢が止まったら大便が通じなくなって、シャックリをして、度々うわごとをいう者を治す。